

草地造成上の2、3の問題点について

広瀬 又三郎

原野・山林を開墾し、牧草を播種するいわゆる集約牧野造成の技術は、最近急速な進歩をとげた。今日では随所に立派な人工草地がみられるようになり、中には圃場の殆ど全部に牧草だけを作って乳牛を放牧している。正に草地農業といえる営農形態まで見られるようになった。

今日の立派な草地も過去には幾多の苦い失敗の経験を重ねて、その上に礎き上げられたものも多い。ではどういう点に失敗の原因があったのか、この問題をふりかえてみるのも、先人の経験を生かし、今後の参考とも成り、あながち無駄ではないと思われるので、2、3見聞した中から若干の問題について述べてみたい。

1、播種期について

2、3年前ある数カ所の開拓地を廻ってみたところ、外の条件は大体よいとみられたが、播種期が遅かったことが唯一の失敗原因と推定されるものがあった。しかもこれはその地帯に共通する原因であった。この播種適期をのがした原因にはいろいろあるようであるが、如何にも惜しいという気がした。牧草を作るからには外の主要換金作物と同等に扱って欲しいものだとの感を強くしたことであった。

2、種子について

まいた種子が悪いために、ある草種が生えていない場合も最近よく見かける例である。これは種子販売業者に注意して貰わねばならないことである。同時に現状としては種子を早めに入手して、一応発芽試験を行なってみて、その上で播種量を調整する必要がある。種子は各国から輸入し、中には熱帯圏を通ってくるので、不良種子となるのもあるらしいので、発芽率には注意する必要がある。

3、施肥量について

人工草地造成事業の始まった当初は、草に対する施肥の知識も少なく、したがって施肥糧も少なく、中には三要素の施用も欠いた例もあった。抜根・開墾・整地には多大の労費を投下したにも拘らず、肥料の不足が失敗の決定的原因となっていた事例も割合多かったように見られた。

今日では牧草の高位生産が大きくとり上げられるようになり、牧草に対する施肥の効果も深く認識され、非常に多くの肥料が投下されるようになってきた。飼料作物と栽培の集約度の一つの指標として、肥料施用量があげられると思う。飼料作物の収量の個人間の隔差はかなり大きい。その差は肥料の多少にある場合が多いので、施肥量、肥料の種類等の問題は重要である。この施用方法の詳細は省略する。

4、立地上の問題

牧草の栽培地を宅地からの距離で見ると、明らかに二つの形を示している。一つは宅地に近い型で、自家用蔬菜畑と同じ距離にある。他は対照的に最も遠い処にある。近い処はよく管理されて収量も上がり、よく利用されているが、遠い処はかなり問題がある。折角作った草地が農業経営上に果す役割は案外小さく、余り効果も発揮していない例も散見される。家畜からの必要性、利用法、運搬手段、労力などよく検討の上着手すべきで、草が余計あればないよりよいという程度で草地造成した場合には、かえって経営上大きな負担となっている例もある。草地造規模と家畜の飼養頭数との間にタイミングを合わせる必要がある。以上の配慮を欠いたために既に余り効果が上がらない原因を内包していたとみられる事例もあった。

岡山畜産便り 1961.09

5、技術の受け入れ方について

草地造成に失敗した事例と成功した事例とを比較してみると、指導技術の受け入れ方によって結果が大きくわかれている場合がある。

一例をあげるとササの多い山林を開墾して多くの肥料を投下してよい草地を作った処があるが、この場合設計通りの肥料を投下したことは、この地帯の初めての仕事としては高く評価されるべきであろう。始めて草地造成を行なう地帯では設計通りの作業を行なうことが必要であろう。

以上初歩的なしかも常識的なことがらについて述べたが、若干の現地をみて、同じことを2回くりかえさないためにと考えて敢えて述べた次第である。

<筆者 関東東山農試草地部>